

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

瀬田宗次郎物語―韋駄天と呼ばれた男―

### 【作者名】

あずき@

### 【あらすじ】

チートオリ主こと瀬田宗次郎は、気が付けば大戦時のゴタゴタに巻き込まれていた。しかも特典と言える特典は『縮地』のみという有様。

「いつになったらとことんまでやってやる！」と意気込んでみるが………

果たして彼は無事、生き延びることができるのか

Q・そのために僕に足りないものはなんですか？

A・情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！そしてエナによりもオ  
速さが足りない！！

嘘だと言ってよ、バーニー………

## プロローグ

常にニコニコ感情欠落、瀬田宗次郎です

皆さん、どこかで聞いた名前だなあ、とお思いでしょうっ？

そうです。僕は今、るろうに剣心に登場する敵役の一人、天剣の宗次郎になってしまったのです。

いわゆる転生というやつですね。

因みに『縮地』も使えますよ〜。

『縮地』とは驚異的な脚力で初速から一気に最高速に達し、一瞬で相手の間合いを侵略することができる幻の移動術のことで、そのスピードたるや凄まじく、『目にも写らない』程だと言います（参考文献：Wikipedia）。

まだ実際に使ったことないからよくわからないけどね。

まあ、普通ならこの特典があれば、チートオリ主として十分やっていけるわけです。そう普通なら…

？  
どういっわけか、とりあえず見ていただいた方がわかりやすいかな？

「ガアアアアア！」

……どう思います？ ドラゴンですよ、ドラゴン！ どないせーちゅっんですか！

と、そんな弱音を吐く間もなく繰り出されるドラゴンによる噛み付き攻撃が宗次郎を襲う！

「くっ」

慌てて飛び退く宗次郎。回避はなんとか成功した。

（あ、あれ？ 意外といける…？）

なんて考えていたら今度は、前脚の鋭い爪による引つ掻き攻撃が次々と繰り出される。

必死に地面を転がるようにしてギリギリのところまで避けていく宗次郎。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

（このままじゃ埒が明かないぞ…！）

ちょこまかと動き回る宗次郎に苛立ったのか、ドラゴンは再び大きく吠えると翼を激しくはためかせ、今度はその巨体ごと突進させてきた。

「ッ！ くそったれ！ やってやる」

宗次郎は、一か八かで唯一のチート特典『縮地』を使用した捨て身のタックルを敢行した。

宗次郎とドラゴンが一瞬交差する。

宗次郎が恐る恐る目を開けて後ろを振り返るとそこには、胴体を貫かれたドラゴンの姿があった。

ドシンツと横合いに倒れるドラゴン。

するとその口からコロコロとなにやら丸い石らしきものが転がり出てきたのが見えた。

彼はそつと近づきその石を手に取った。

「なんかこれ……どっかで見たことあるような……」

『あら？ どっかで会ったかしら？』

キエエエエアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

「……いえ、こっつて直接お会いするのは初めてですよ。玉みえさん」

『堅苦しいわね。曲がりなりにも命の恩人なんだからもつと気軽に玉ちゃんでもいいわよ。それで？ 貴方のお名前は？』

「ああ、失礼しました。僕の名前は、瀬田宗次郎。宗次郎とお呼び下さい」

『宗次郎ね。よろしく』

「あの……ところで玉ちゃん。つかぬ事をお聞きますが、タルート君って知ってますか？」

『タルート？ 聞いたことないわね。洋菓子か何かかしら？』

それはタル下。

「そうですね。知らないならいいんです。気にしないで下さい。

それにしてもここはいいじゃないですか？

「ごく自然にドラゴンとエンカウトしてしまうあたりをかんま見るに古代ヨーロッパあたりかと予想しているんですが…」

『うーん。詳しいことはわからないけどたぶんそんな感じじゃないかしら？』

唯一私ができるのは、ここが「魔法先生ネギま！」に出てくる魔法世界だということくらいよ」

「…今なんて言いました？」

『ここが「魔法先生ネギま！」の魔法世界だって「ありがとうございませす。もうオツケーです」…あら、そう？』

(マズイ…！ マズイ…！ マズイ…！)

これはかなりシャレにならないぞ。ネギまの魔法世界ってあれだろ？ 大戦とかで人がバンバン死ぬ時代のあれだろ？ 冗談じゃない！ あんな平和の「へ」の字もないような戦時中真っ只中にいられるか！ 僕は現代日本に帰らせてもらおう！ な〜んてできたらとっくにやってるんだけどな〜、どっ畜生〜

『だいぶ思い悩んでるみたいだけどどうかした？』

「え、あ、いや…なんでもないよ。あはははは…」

さてさて、いつまでもこんなところにいるもきりがないからとりあえず移動してみようか。

ここがああ魔法世界ならもしかしたらまだ大戦の影響を被る以前の平和な街が存在する可能性があるしね」

『そうね。じゃあさっそく出発しましょう』

こうして僕、瀬田宗次郎と玉みえこと玉ちゃんによる潜伏先探しの旅が始まった。

## 第2話

とある山村近くにある名もなき山の奥深くに位置する天然の鍾乳洞内に居を構えることにした宗次郎と玉ちゃんは、とりあえずこの世界の現状把握に勤めることを第一の目標に考えることにした。

例のドラゴンと対峙したのが、今から約3日前。それから(驚いたことに)僅か半日程度(日の傾き具合で把握した)で現在いる山の麓の村を発見したのだ。

到着するなり宗次郎は、目に付いた村人に片っ端から質問をぶつけた。

しかしここが、ど田舎過ぎて大戦が起きていることを把握していないのか、それともそもそも大戦自体起こっていないのか、村人からはなんら有益な情報を得ることができなかった。

そして現在、宿のない村内を移動して仕方なく山奥に籠もっているというわけだ。

「はあ…なかなか上手く事が運ばんねえ…」

『そう？ ーこうして住むところも確保できたし割と上々じゃないかしら』

「…玉ちゃんって思ったよりプラス思考だよね」

『いやあん。そんなに褒めらると私…私……!』

「ダ、ダメ 玉ちゃん、落ちつ」『ビリビリしちゃう』

ギヤアアアアア

「

説明しよう！ 玉ちゃんはおべっかに滅法弱く照れるとついつい電撃を発しちゃうのだ。

加えて説明させてもらうと、卑怯な事が大嫌いでそのような行為をした者には、電撃を光線に変えて肅正せずにはいられない性質（たち）なのである。

ぷすぷすと丸焦げになった宗次郎がうつ伏せに倒れ伏す。

『あ、あら。私ったらまたやっちゃったわ。ごめんなさい！ 宗次郎』

「い、いえ……避けられなかった僕の修行不足ですから……」

『それもそうね』

アツサリ。

その後は、玉ちゃんの『ならやること是一つよ！』の一言で魔法球内部に入ることになった。

この魔法球、なにを隠そう玉ちゃんの中なのである。このことに気が付いたのは、つい昨日の事であった。

しかも有難い事にこの魔法球、中での一日が外では僅か一時間に設定されているのである。

加えて魔法球に入ると自動的に装着されるミニ玉ちゃん入り不老の指輪（通信機能プラス電撃アシスト機能付き）が実にナイス！



ただ一つだけ気になる仕様が……

「……なんでこの指輪、左手薬指なの？」

『なんでってなんで？』

寧ろ尋ねられても困ってしまうが、宗次郎は何か諦めた様子でこの話題をさっさと切り上げることにした。

魔法球内部は実に殺風景で山と大地と空のみで区切られていて、それ以外は地平線の彼方まで何も見えない。

ただしこの中には、無数の生物達が生息しており、玉ちゃん曰く、『最初から住んでいたんだから仕方がない』とのことらしい……うん、考えちゃダメ、考えちゃ。

宗次郎はもっぱらそれらの生物の協力を得て特訓を敢行するのだが、これがキツイのなんのって……

玉ちゃんの電撃アシスト（という名の愛の？鞭）と相まって宗次郎の心身を激しく苛め抜いていくのである。

特訓も今回で5回目となるが、中々どうして慣れないものである。

……果たして今回は無事、生き残れるのか……

「ははは……嘘だろ？」

宗次郎のすぐ目の前に立ちはだから、全長にして10mは有にある

つかと言つほどの巨大な生き物の姿がそこにあった。

『ふっふっふ。驚いた？ 今日の対戦相手は、ジャジャーン！ ティ  
ラノザウルスです』

「ガアアアアアア」

「死ぬわあああああ」

襲い来るティラノザウルスから必死に逃げる宗次郎。

常に『縮地』を使用し続けているにも関わらず少しも引き離せないのは、ここのティラノザウルスが異常なのか、それとも自分がトロイのか……とにかく今、確実に言えることが一つだけある。

それは『このままでは確実に殺されてしまう』と言つことだ。

(このままだと僕の体力が先に尽きてしまう……！ こうなったらやるしかない！)

絶壁に囲まれた袋小路に追いやられた宗次郎はピタリと足を止めて振り返る。

「ガアアアアアア」

相変わらずティラノザウルスは、ヤ(殺)る気満々でコチラに向かって走ってくる。

互いの距離が5m……4m……3mと着実に狭まっていく。

『マズイわ、宗次郎！ 避けて』

2 m…

「はああああああ……」

1 …… 0

「ハッ  
」

激しい地鳴りと共に巨大な岸壁が次々と崩れ去っていく。

しばらくしてようやく衝撃が収まり、砂煙が晴れると薄っすらではあるが、どういった様子なのか見えてきた。

そこには崩れた岩に押し潰されてぐったりしたティラノザウルスの姿があった。

では肝心の宗次郎はどうなったかと言つと……

『まったく…あんまり無茶しないでよね……宗次郎』

「あはははは……いやぁ悪い悪い。でも今回は上手くいったわけだし許してよ。ね？」

『うっ…も、もう！ 今回だけよ まったくウインクは反則だつての…ブツブツブツ……』

どうにか事なきを得た宗次郎だが、いったいどのようにしてこのピッチを乗り切ったのか、それは偏に彼の持つ超人的なジャンプ力によるものだった。

「いやぁホント、玉ちゃん直伝の『震脚』がなければどうなっていたことやら……想像しただけでも震えが止まらないよ」

『ふふふ。そうでしょ、そうでしょ？ せいぜい感謝なさい？』

「うん、もちろんだよ！ できよかったらなんだけどまた何か新しい技教えてくれたりなんかしない？」

甘える様な猫なで声で迫る宗次郎。

今のところ宗次郎の使える技は全部で三つだ。

一つは、震脚。もう一つは、震脚を利用した二重の極み。そして『縮地』を使用した捨て身のタックルである。

いくら一つ一つの技が強力とは言え、この三つだけではこれから先、心許ないのは確かである。

故に宗次郎はいち早く新たな技の修得に励みたいと考えていた。

そしてそれを実現出来るのが、相棒の玉ちゃんなのである。

玉ちゃんはとても博識でこと修行と名の付くものに関して知らないことは皆無と言っていいほどののだ。

「ね、玉ちゃん。お願い」

頬ずりしながら懇願する宗次郎。

『アウアウアウ……！ わわわ、わかったから！ わかったからとりあえず落ちつきなさい！ 教える！ ちゃんと教えるから』

照れからか真っ赤になって湯気を上げる玉ちゃん。

「ホント やったー」

『ふう…まったく調子いいんだから……』

「で？ で？ 今日は何を教えてくれるの」

『そうね。じゃあ今日は『縮地』を利用したタックルの進化形…なんてどうかしらっ？』

「お〜。なんか凄そうだね！」

『もちろん威力はお墨付きよ。ただしマスターするには一朝一夕ではいけないわ。覚悟は出来てるかしらっ？』

「もちろんだよ！」

『よし。じゃあまずは、軽く説明をするわ。』

「この技は『縮地』の進化形と言ったように『縮地』よりも更に早く動くことで全身を粒子と化してそのまま敵の身体を突き抜けるというものよ」

「なっ ……そんなことホントに可能なの？」

『ええ、もちろんよ。実際にこの技を使っていた者も存在するしね』

「ええ それっていったい誰なの」

『菅下竜二。漫画D・N・A2・に登場する超能力者よ』

「超能力……」

『彼はテレポーテーションの速度を半分に減速することでそれを可能にしたわ。』

アナタはその逆、『縮地』の倍早く動けばいいのよ』

「なるほど。確かに一朝一夕ではいかなそうだね。……でも」

『やり甲斐はある』そう言って満面の笑みを浮かべた宗次郎の眼差しは沈みゆく夕陽よりも紅く燃え上がっていた。

### 第3話

転生してから半年余りの歳月が過ぎた。

現在、僕は何をしているかというところを簡単に言えば傭兵を兼ねた運び屋だ。

え？ 傭兵はわかるけど運び屋ってのがいまいちピンと来ないって？

まあ、簡単に言えば、誰もが忌避するような危険地帯（例えば近くにドラゴンがウロついたりしていたりするような場所だとか、魔法生物がウジャウジャいたりとか）に注文一つで向かって行き、お預りの品をお届けする仕事だ。

ルールとしては、こちらからは決して運ぶ品や場所を選ばない決まりだ。それこそ人間だっていいし、砂の一粒だって構いやしない。

因みに今のところ一番多いのは、自分をどこどこまで無事に運んでくれ、といった類の注文だ。これが傭兵家業に繋がるというわけ。

こういった注文が増えた原因は、恐らく最近になって帝国サイドと連合国サイドがドンパチおっ始めたことからだろう。

嫌だ嫌だと言いつつも、こつこつ需要があると大戦も馬鹿に出来たもんじゃないなあ、なぐんて思ったりする今日この頃。

……僕もだいぶこの世界に染まってきたなあ。

「はいよ！ お客さん。」「注文の目的地まで到着しましたよ」

「お〜、御苦労さん！ いやぁ相変わらず早いね〜。」

まあ、そもそも人力車で砂漠を渡るなんて人間離れした芸当、宗ちゃんくらいしか出来ないけどな」

「ははは。これでも一応、安全かつスピーディーに、がもっとうですか  
ら」

「流石だねえ。ところで宗ちゃんは、もう少しここに居るのかい？」

「そうですね…まあ今のところは、これと言った注文もありませんし、  
少しくらいゆっくりしていくのもありですかね〜」

「お〜、それなら今からアソコの酒場で一杯どうだい？ 礼を兼ねて  
是非とも自慢の地酒を呑んでもらいてえんだ！」

「……真っ昼間からですか？」

「がっはっは！ 構いやしねえよ！ こんな御時世だ。少しくらい  
ならお天道さんも許してくれらあ」

酒場に入ると予想外にも中は、昼間にも関わらず満員御礼の大盛況  
だった。

ただし客層がかなり特殊でその見た目から判断するにどこぞの傭  
兵団か何かのように思われた。

「あ、そ〜れ。いき〜いき〜いき〜いき〜」



「がっはっは！ いいゾ！ いけいけー！」

「んく…んく…んく…ぶはあ〜！ どじょ」

酒らしきものを樽ごと一気に飲み干した筋骨粒々の大男が、周りから惜しめない拍手と「スゲー」「いいゾ！」「流石ラカンだ！」と言った称賛の声を受けている。

（ラカン てことは、これがあのチート無限のバグキャラか……）

宗次郎がマジマジと見つめていると突然ラカンが話しかけてきた。

「ん？ お〜、兄ちゃんこころじゃ見ない顔だな。新入りか？」

「えっ あ〜、僕はその……」「この兄ちゃんも傭兵だよ」「ちょっとおっちゃん」

「おー！ そうだったか！ 人は見かけによらねえなあ。てっきりどこの貴族のお坊ちゃんかと思っただぜ」

「……ギャハハハハハハ……」

「あははは………」

『むっか〜〜！ ちょっとなによコイツら！ バカにしちゃって。ムカつくわねえ』

「まあまあ。実際この見た目だし仕方ないよ。それより今は早いところの場から脱出することを考えよう」

「なあ兄ちゃん。お前さんも傭兵の端くれなら腕には、そこそこ自信

があるんだろ？」

「へ？ まあ、それなりには……………」

「だったらよ。一つ俺と勝負しねえか？」

そう言うとラカンはニヒルな笑みを浮かべた。

それに合わせて周囲のギャラリー達もやんちゃやんちゃと騒ぎ立てる。

「勝負……………ですか？」

「そう。勝負だ。どつするよっ。」

「……………わかりました。この勝負受けます」

その一言にギャラリーの盛り上がりが最高潮に達した。

『いけー！ー！ 宗次郎ー！ー！ そんなヤツぎったんぎったんに  
のしまえー！ーッ』

玉ちゃん……………

（やれやれ。厄介なことになってしまったぞ……………）

「で、勝負の内容なんだが『腕相撲』なんてのはどうだ？」

「ふむ……………いいでしょう。それで構いませんよ」

「因みにハンデとして俺は左腕一本に対してお前さんは「いらな  
いですよ。そんなの」……………へえ。本当にいいのか？ 後になって後悔す

るなよ?」

「こちらのセリフです。吠え面かかせてやりますよ」

一見、ニコニコしているがよく見ると顔面に濃い陰が指している宗次郎。こつ見えてだいぶ『キテ』いるようだ。

宗次郎とラカンの間に目に見えない火花が散る。

二人のあまりの気迫にいつの間にかギャラリー達も鎮まり返っていた。

(『そ、宗次郎。ブチギレちゃってるわ。どうでしょう……』)

当然、どつすることもできないまま、腕相撲対決は幕を開けた。

「いいか? 勝負は一回限りだ。レディゴの合図と共に開始する。わかったな?」

「了解した。早く始めよう」

「よし。じゃあおっちゃん。掛け声頼む」

「あ、ああわかった。それじゃあ両者、手を組んで……レディ……  
ゴーツ」

「うおおおおおおおお

」

この時、この場にいる誰もが『ガンッ』というまるで何か鉄の塊みたいなもの打ち付けるような強烈な音を耳にした。

だが誰一人としてその音の発生原を見誤らない。何故なら今、店内は対戦中の二人を除いて皆、固唾を呑んで勝負の行方を見守っているからだ。

「グオオオオオオオ」

「ガアアアアアア」

両者の腕はテーブルの中央からピクリとも動かない。

互いの力が拮抗したまま、数分が経過した。

「い、い加減、あき、らめ、やがれえええええ…！」

「そっち、の、ほ、う、こ、そおー…ッ！」

すると次の瞬間、バキッという乾いた音と共に二人の腕を支えていたテーブルが真っ二つに割れた。

「がっ」

「ぐっ」

二人はその割れ目に吸い込まれるようにして地面へと落下していった。

砂埃が晴れると二人共、床の上に仰向けになって目を回していた。

「りょ、両者ドロ…」

「……………うおおおおおおお」

「……………」

「ぐっ…痛痛痛痛う…はっ！ 勝負は」

慌てふためく宗次郎。

「ドローだよ。そら捕まりな」

「あ……ありがとう」

すでに起き上がっていたラカンの手を取り立ち上がる宗次郎。

それからしばらく、互に見つめ合っていたが突如、満面の笑みを浮かべて仲良く肩を組みだした。

「テメエこの野郎！ やりやがるじゃねえか」

「アンタの方こそな ジャックラカン」

「ほぐ。俺のことを知っていたか！ そんなじゃあ俺もお前さんの名前を知っとく権利があるよなあ」

「おうよ！ 僕の名前は、瀬田宗次郎。運び屋兼傭兵だ！」

「運び屋の宗次郎…なるほど。どっかで聞いた名前だと思ったらそう言うことか… どうりでやるわけだ」

「あれ？ 僕ってそんなに知られてるの？」

「ここいらじゃ有名人だぜ。どんな危険地帯でもその足二本で淘汰しちまうネジのぶっ飛んだクレイジーな野郎だったな」

「ははは…とんだ言われようだけど一切否定できないや」

「ま、とにかく今夜は飲もうや！ な？」

「おう…」

『やれやれだわ…』

「じつして宴の夜は老けていった。

夜半過ぎ、大量の人がひしめき合ってそこいらに寝転がっている中、ラカンだけがカウンターで一人酒を飲んでた。その隣では宗次郎が酔い潰れて眠っている。

「全く可愛い顔してとんでもねえ野郎だぜ。まさかこの俺様が絶対の自信を持つパワー対決で引けを取らねえとはな」

そう独り言を呟くとグイッと酒を一気に飲み下し、それからそっと立ち上がると何の気なしにフラッと対決跡地に足を向けた。

そして彼はそれを見てしまった。

「なっ　　「これは……」

そこにあっただのは、床に空いた小さな二つの穴だった。

「なるほど。伊達に運び屋を語ってなかったってわけだ」

ラカンはニヤリと不敵な笑みを浮かべるとそのまま店の外へと消えていった。

「……………」

『どうやらバレちゃったみたいね？』

「うん。まあいいさ。どちらにしろいつかはバレることだったし」

『ふふ。そうなの？ 宗次郎の今の顔、だいぶ悔しそうだけど？』

「もう！ からかわないでよね」

そういつとふて寝する宗次郎だった。

今回の勝負、実はカラクリがあった。

いくら宗次郎でもこの体格差では、とてもじゃないがラカンには適いつこない。そこで彼は自らの足を床に突き刺して体ごと固定したのだ。そうすることで踏ん張りが効いてラカンの馬鹿力にも対抗出来る…訳がないので床から更に奥、地面の深いところまで突き刺したのだが…まさかそれでも互角とは、宗次郎からしたら思いもよらないことだった。

実質、ラカンは大地と腕相撲をして引き分けた男ということになるのだ。

…とんだバグキャラである。

翌朝、二日酔いの鈍い頭の痛みと共に目を覚ました宗次郎は、店の外に出て大きく深呼吸をした。

「よう。よく寝れたか？」

「ん？ ああラカンか。早いんだな」

「俺様くらいになればただか一日寝ないくらいなんともねえのよ」

「あんだけ飲んでいて元気だねえ。おかげで僕は二日酔いだよ」

「おいおい。しっかりしてくれよ。そんなんでこれから先、俺の相棒が務まるのかい？」

「ん？ まあなんとかな……ゴメン。今なんて？」

「ん？ だからあのくらいの酒で二日酔いなんて」そこじゃなくてその後！」「……いや、そんなんで俺の相棒が務まるのかって……」

「ちよいちよいちよい！ 相棒ってなんだよ」

「へ？ 俺とお前のことだろ？ お前が運び屋で俺が付き添いの傭兵。俺たち二人で組みゃあ敵なしだぜ！」

（コイツ、マジか……でもまあ……相棒か……そう悪くないかもな……）

「おい。どうした？ 吐きそうなのか？」

「はあ……お前のおまりの馬鹿さ加減に呆れてたんだよ」

「お？ なんだオイ。機嫌良さそうじゃねえか！」



「うっせーよ。頭に響くだろーが。ったく……ま、今後ともよろしく頼むわ。『相棒』」

「！おつよ 任せとけ」

これが宗次郎の新たなる旅の幕開けだった。

## 第4話

ラカンとコンビを組むようになってだいぶ仕事がやりやすくなった。

道中現れるモンスター共は放っておいても勝手にラカンが始末してくれるし、人力車じゃ明らかに定員オーバーな時には、ラカンの身体に直接、客を引っ付ければなんとかなった。

正直、ここまで役に立つとは思いつかなかった。

「お？ どうした？ なんか用か？」

「いいや。ただお前がやけに楽しそうにしてるから…それがなんとなく意外だな」

「楽しそう、か……そうだな。実際、かなり楽しいぜ！ 今まで俺は傭兵稼業しかしてこなかったからこういふ地道な力仕事は新鮮なわけよ！」

「へへ、意外と性に合ってるんだな。いい拾いものしたわ」

「がっはっは！ 当然だろ？ なんてったってこの俺様だぜ？ お前は宇宙一のラッキーボーイだぜ」

「ボーイ言うな。まったく…調子のいい奴め……」

『ちよっと2人共。目的地が見えてきたわよ？』

「あ、ホントだ」

「サンキュー。玉！」

『玉、言うな！ 馬鹿ラカン 』

「がっはっはっは そんな電撃、効かんぞ！ むしろ肩こりが取れて助かるくらいだぜ……」

『ムッキーッ！ チョー腹立つウー ちよつと宗次郎！ この馬鹿になんとか言っちゃってよ 』

「まあまあ。ラカンも悪気はないんだし許してやってよ。ね？」

『な、なによ！ ムキになった私が悪いって言うの そもそも宗次郎はラカンに甘過ぎよ……』

はっ……も、もしかして………ホモ？ 』

「ブーーーーッ」

玉ちゃんの意外な一言に思わず噴出する宗次郎。

「んなわけないでしょ 気持ち悪いこと言わないでよね！」

『だってその見た目だし……。それにこの前だって女装したりしてたじゃない』

「あ、あれは酔っ払ったお客が無理矢理、着せてきただけで僕は別に………」

「でも割と満更でもない感じだったよな？」

「ラカン！ テメエ 話をややこしくすんじゃないねえーッ」

『ほぐら、ヤッパリそうなんじゃない。正直に認めちゃいなさいよ。今ならまだ間に合うわよ？』

「間に合うってなにが」

『いや、ほら。式とか披露宴の段取りとか』

「ふざけんなーーッ」

と、まあこんな調子で結局、最後はいつも宗次郎が弄イジられて終わるのがお決まりのカタチなのだ。

「はあ…はあ…はあ…」

息も絶え絶えな宗次郎。

「それはともかくさっさと中に入るうぜ？ 中々デカイ街みてえだし酒場も良さげだしな！」

『そうね〜。ホラ、いつまでもへバってないで行くわよ？』

「ちよっ…2人共、待ってよ〜」

予定通り積荷を指定先に届け終えた一行は、その足で街酒場に直行した。

「邪魔するぜ」

ラカンが入店すると一瞬、客が静まり返ったが、間もなくして再び喧騒を取り戻した。

席に着くなりラカンはビールを樽で注文し、僕は適当にカクテルを頼んだ。

乾杯のコールの後、つまみなんかを飲み食いしていると突然、カウンター席の方から何やら揉めている声が聞こえてきた。

「テメエ！　なんだこのカクテルはよお　こんなドス黒い液体が飲めるかア　」

「そ、それは当店自慢の一品でございます。我がウエスペルタティア王国原産の果実を使用した特別なカクテルでー」

「んなことあどうだっていいんだよ！　とにかく俺はまともな酒を飲みてえんだ　わかったか　」

「わかってねえのはお前の方だろーが」

「ああん？　なんだアンタ？　店の関係者か？」

「いんや。ただの酔っ払いだ」

「なら引ッ込んでな！」

「そうはいかねえなあ。このままアンタを放置してたらせつかくの美味い酒が不味くなっちゃう」

「あんだと〜?」

一触即発の雰囲気醸し出す両名。そこに慌てて宗次郎が割って入る。

「おい! やめとけ! ラカン」

「! チツ! わ〜ったよ」

「あ〜? なんだテメエもこのデカブツの仲間か? おお?」

「ええ、まあ似たようなものです。すいませんね。すぐに席に戻りますんで」

「ちよいと待ちな」

「はい?」

「こちとら言われのない因縁付けられて最悪の気分な訳よ。そこで、だ。兄ちゃん、テメエがそのデカブツの代わりに責任取れや」

「テメエ…調子乗ってんじゃ」「ラカン!」…クソッ

「分かりました…僕で良ければ責任取らせて頂きます」

「よし。じゃあこっち向いてくれ」

男はニタニタとイヤらしい笑みを浮かべて指図する。

「これでいいですか?」

「ああ。バッチリーだッ」

「ガハッ！」

男におもいつきり顔面をぶん殴られる宗次郎。

「ッ　　宗次郎　　このクソツタレエエエエッ」

ラカンは男の胸倉を掴み一気に持ち上げる。

「ぐっ…く…く…！　はっ、離せッ　　このデカブッ」

「テメエだけは許さねエ…その汚ねエ面、一旦グシャグシャにしてリサイクルに出してやるッ」

「ひっ　　だだだ、誰かッ！　誰か助けてくれエー…ッ」

「へっ…誰がテメエなんかを「おい」「ああ？」

ラカンが振り返るとそこには、見覚えのない赤髪の青年が立っていた。

「？　用なら後にしてくれないか？　俺は今、忙しいんだよ」

「そうはいかねえなあ。いいから大人しくその手を離しな。でない  
と……」

「でないと？　なんだよ」

青年はクッと片側の口角を吊り上げて不敵な笑みを見せる。

「ブン殴る！」

「ッ コッ」

とてもその見た目通りの青年が放ったとは思えない程、強力なパンチがラカンを店の外まで勢いよく吹き飛ばした。

ラカンの手から解放された男は、尻餅を付いていた。

「おい。アンタ。大丈夫か？」

「ひっ……ヒイヒイヒイ」

「あっ！ おい！ ……行っちゃまった」

「オイッ！」

「ん？ ガッ」

「よくもやってくれたな。お返した」

今度はラカンの右フックが青年を吹き飛ばした。

青年は店の壁を突き抜けてそのまま次々と隣りの店からそのまた隣りの店へと飛んでいき、最終的には外へと放り出された。

野生的な笑みを浮かべたラカンは、獣の如き勢いで青年を追いかけていった。

外では既に多くのギャラリーが青年を取り囲むようにして佇んでいる。



「い、痛痛痛痛……はっ」

「ウオオオオオオオ  
トーーーーーッ  
ラカンッ  
インパク

「ハアアアアア  
くらえッ  
千の雷ッ」

二つの凄まじいエネルギーがぶつかり合い、やがて一つの大きな熱の塊となった。

その塊は大地を大きく抉りながら地中深くに潜っていった。

でっかく空いた空洞を挟んで向かい合う両名は共にボロボロの状態になっていた。

それでも互いに笑っている様は異常の一言に尽きる。

「お前やるな。名前はなんてえんだ？」

「ナギ。ナギ＝スプリングフィールド。そういうアンタは？」

「俺様はラカン。ジャック＝ラカンだ！」

「そうか。……じゃあ自己紹介も終わったことだし、な？」

「ああ！」

「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」

両者の戦いが再び火蓋を切った。

一方その頃、宗次郎はというと……

「いやあわざわざすみませんねえ。後片付けの手伝いなんてさせちゃって」

「いえいえ。こちらこそウチの者が本当に申し訳ない」

「そんな！ 元はと言えばウチの馬鹿が――」

「それを言ったらウチの馬鹿の方が――」

ナギの連れを名乗る三人組の一人、近衛詠春と荒れ果てた店内を掃除していた。

その後、弁償に関して後に分割で支払うことを彼ら――赤き翼の名で約束しどうにか事なきを得た。

ひたすら感謝の意を唱える宗次郎だったが「どうせ謝るならいつそ赤き翼に入って堂々と恩を返してはどうでしょう?」という突拍子もない提案を無理矢理飲まされるカタチと相成った。

(損得勘定はいけないことだけど……なんか理不尽な気がするのはいか?のせいかな?)

「そんなに心配しなくても直に慣れますよ」

「いや、そういうことではなくてですね? イマさん」

「むむむ　　今なんと言いました」

「へ？ えーっと…そういうことではなくてですね。イマさんと『それそれ』…はいっ。」

「そのイマさんという響き……最高です！ 実に甘美！」

「はあ……そうですか」

（アルってこんなキャラだっけ？）

訝しむ宗次郎。

「あゝ、しかもこんなに可愛い男の娘にアダ名で呼ばれるなんて…  
テンション上がってキターーーー」

……この発言は聞かなかったことにする宗次郎だった。

「すまんのお。ウチのアホ共が迷惑をかけてしまった」

「あ、いえそんなことは……」

（彼がゼクト……ナギの師匠か）

「ところでお主が今、首に紐で巻き付けている宝玉は魔法球かなにか？

思っにかなり希少な品とお見受けするが……」

「あゝ、これは『流石！ お目が高い』……もう慣れたよ……」

「なんと！ 魔法球が喋りおった」

『フフン。まゝ私くらい《希少》ともなれば当然よね』

(うわ〜……)

「ふ〜む…こいつはなんとも研究しがいがありそうじゃの〜」

(………なんか今、物騒なセリフが聞こえた気が………)

「これからよろしくの〜」

『ええ。もちろん〜』

「わーっはっはっはっは」

いったい自分がゼクトからどのように思われているか露知らず高らかに笑つ玉ちゃんなのであった。

「不安だ………」

その後、ボロボロの状態で肩を組んで現れたラカンとナギが合流し、改めて自己紹介をした宗次郎と五人と一個は、簡単な決意表明をしてから酒を酌み交わした。

こうして『新生・赤き翼』が誕生するに相成った。

## 第5話

宗次郎が赤き翼に加入して約一ヶ月。

いくら足が速いとは言え、流石に運び屋との二足のわらじにも限界が生じ始め、現在はもっぱら赤き翼としての慈善活動を兼ねた傭兵稼業に限られていた。

そのことを酷く気に病んだ宗次郎は、自らを見つめ直すことにした。

そうして導き出した結論は、圧倒的な体力不足であった。

「だから皆、頼む」

「うーん。いきなり僕を鍛えてくれ、なんて言われてもなあ」

宗次郎の突拍子もない願いに流石のナギも困惑の色を隠せない。

「そもそも気にし過ぎなんじゃねえか？ 俺から見てもそこまで体力面で劣ってるようには見えねえぞ？」

「ラカンに言われても嫌味にしか聞こえないんだが……とにかく頼むよー」

ただ僕に向かって攻撃してくれるだけでいいんだ。な？ 簡単だろ？」

「で、それをひたすら回避し続ける、と。」

果たしてそれで実際に体力が付くのかのう？ もっと効率のいい方法があるんじゃないか……」

「その点は大丈夫です。玉ちゃんのお墨付きなんで！ ね？ そうでしょ？ 玉ちゃん」

『ええ。まあそうね。……かなり危険な方法だからあまりオススメはしないけど……』

「……急いで事は仕損じますよ？」

詠春が険しい表情を浮かべて言う。

「覚悟は出来ています」

沈黙が流れる。

「はあ……参ったよ。降参だ」

ナギが諦めた様子で言った。

「それじゃあ……」

「ああ。俺で構わないならいいぜ。その特訓、協力してやるよ」

「あ、ありがとう……」

「ただしやるからには、とことんだ。場合によっては、シャレにならないことになるかもしれないぜ？」

それでもホントにやるのか？」

「もちろん。僕にだって譲れないものがあるんだ！」

「理屈じゃないんだな……わかった！ 俺に任せ、待て待て……なんだよ師匠……まさかダメなんて言わねえよな？」

「その逆じゃ。ワシも協力してやるうと言っくんじゃ」

「いいんですか」

「ワシだって本当は嫌じゃが、ナギがやると言っくんじゃ。監督役と言っく意味でも参加するより仕方なかるう？」

「な、なるほど」

「お二人が参加するなら私も参加させてもらいますよ」

「イマさん……」

「はあ……仕方ないですね。どうなっても知りませんよ？」

「ありがとう！ 詠春。……ラカン？」

「チツ、わーたよ！ やりゃあいいんだろ、やりゃあ。まったく死んでも知らねえぞ……」

「すまない……ラカン。感謝する」

「こうして全員参加の宗次郎強化合宿が開催されることになった。

「そろそろ… トントントンいくぜ？ 魔法の射手 雷の100矢ッ  
」

「ウオオオオオオオ」

ナギの放った射手を回避しつつもひたすら疾走する宗次郎。

現在、彼らは玉ちゃんの内部に設けられた砂漠地帯にいた。

足腰に負担をかけると言う意味でこの場はもってこいなのだ。

と、そうこうしていると今度は左右の方角から幾重もの射手が飛んできた。姿こそ見えないが恐らくゼクトとアルによるものだろう。

それらを何とか回避し終わると今度は頭上から大量のレーザー光線が降り注いできた。

どうやらそれは太陽から直に発せられたものらしい。そんなことができるのは玉ちゃんくらいのものだ。

「ぐはっ」

だいぶ動きが鈍ってきた宗次郎は、完全に避けることができず光線の余波に巻き込まれ前のめりに吹き飛ばされてしまった。

そこへ追い打ちとばかりにラカンの大技、「ラカンWパンチ」が襲ってくる。

「やられて…やられてたまるかアアアアッ」

「



そう叫ぶと渾身の力を振り絞ってジャンプする宗次郎。

その間も絶えること無く降り注いでいたレーザー光線を以前、玉ちゃんから教わっていた『剃』により難なく回避。

着地と同時に迫り来る雪崩のような射手は、逃げ回る際に使用していた『スーパースニックアタック』により蓄えられた電気エネルギーを利用した『神速(カナムル)』を使用することでどうにかその場を離脱することに成功した。

「逃がすか！ 雷光剣」

いつの間にか間近に迫っていた詠春による強烈な斬撃が襲い来る。

「ッ 『二重の極み』」

宗次郎が放った神脚を利用した『二重の極み』によって地面が大きく爆ぜる。

急いでその中に体を潜り込ませることでなんとか事無きを得た。

そのまま砂の中を泳いでいき頭上からの振動が止んだ頃に顔を出す。

すると目の前にエラくご機嫌な笑顔のラカンが仁王立ちで佇んでいた。

「惜しかったな。残念ながらスタートに戻るだ！ 『そよ風烈風拳』」

「！」

「ゲアアアアッ」

宗次郎はラカンの拳から発せられた突風により勢いよく後方へと吹き飛ばされていった。

……

……

……

……

……

……

……

「はっ ーこは……？」

「よう。目が覚めたか？」

「ナギ……あつ！ 特訓を「特訓なら今は休憩中だぜ」「あ……」

「ったく。無理し過ぎだぜ。もう二度と目覚めねえんじゃねえかと思っただぜ？」

「いめえ……」

「……なあ、そろそろ教えてくれないんじゃねえか？」

「え……？」

「何かきっかけがあったんだろ？ お前がそんなに焦るだけの何か

が

「うっ……相変わらずナギは変なところで鋭いな。ホントは内緒のままでいたかったんだけど……仕方ないか。ほら、覚えてないか？ ちょっと前に帝国の奴らに因縁付けられて一悶着あったこと」

「あ……なんかそんなことあった気がするなあ」

「そんな時にな？ 油断してた僕に向かって魔法の射手が飛んできたんだよ。それがどう考えても回避不可能なタイミングだったわけ。」

射手がスローモーションに見えてきたあたりで僕は死を覚悟した。けどそれは違ったんだよ！」

「？ 違ったって……何がだ？ 今、こうしてお前が生きてるってことは結局避けられたってことだよな？」

「そう！ 避けれたんだよ！ なんてだったってその射手ときたらスローモーションどころか完全に停止していたんだからね！ 後はそいつをこっぴど回り込んでいっちょ上がりってわけだ」

「お前……それってつまり……」

「時間停止じゃな」

「あ、ゼクトさん。やっぱりこれってそういうことなんですね」

「まあ断定はできんがのう。それしか考えられまい」

「でも待ってくれよ。宗次郎は気はおるか魔法すら一切使えないんだぜ？ それがどうして時間停止なんて大それた魔法を使えるように

なっただって言うんだ？」

当然の疑問を唱えるラカン。

「……………魔法じゃないからではないでしょうか」

アルがポツリと呟くように放ったその一言にその場にいた全員が一斉に首を捻った。

「どつという意味です？ アル」

たまらず詠春が口火を切る。

「私も詳しくは知らないのですが、光速を超えたスピードで動き続けた場合にのみ周囲の時間が停止する現象が起こるとか……………」

「……………なるほどつまり射手の脅威に対して宗次郎の肉体が思いもよらぬパワーを発揮して、その結果、一瞬の時間停止を可能にしたと、そう言いたいんじゃない？」

「ええ……………とても信じ難いことですが恐らくはそういつことかと」

「ハア……………なるほどな。それで合点がいったぜ。どつせお前のことだ。アレだろ？ そんな時の感覚を忘れないうちに、なんて考えたんだろ？」

ラカンが溜息混じりにそう指摘する。

「うっ……………まあだいたいそんな感じ……………かなあ？」

「それがあの特訓と銘打った自殺行為というわけですか。呆れて物も

「言えませんね」

詠春も大層呆れ顔だ。

「玉も玉だぜ。お前は「ドイツの考えを全部知ってたんだろ？ どうして止めなかったんだよ」

ナギが責めるようにそう問い掛ける。

『どうしてもこうしても、私だってまさか宗次郎が時間を止めれるようになってるなんてちっとも知らなかったわよ！ 後、玉って言うな！』

「は？ なんてだよ。お前、普段から宗次郎の首にぶら下がってるわけだろ？ その射手を回り込んだ時も一緒に体感できてたんじゃねえのかよ？」

「ナギよ。恐らくそれは間違っておる。時間の停止を感じ取れるのは、あくまで高速を超えるという条件を満たした本人のみに限られたことなのではないかのう？」

「そういうもんかねえ。まどろっこしいことこの上ないぜ。まったく」

「それでどうだったんです？」

アルが宗次郎に尋ねる。

「へ？ どうって何が？」

「いえ、先程の特訓で実際に時間を停止することができたのか気にな



例えば一分後に繰り出す魔法を遅延魔法と組み合わせると唱えれば一分後に魔法を発動することができると言った寸法ですね」

「そのくらい僕も知ってるけど……それがいったいどうしたと？」

「みんなのは、どっぴでしょっ？」

まず予め遅延魔法をかけておいた

複数の雷撃魔法を宗次郎にヒットするように設置しておきます。

それからタイマーが切れて魔法が当たった直後にそのエネルギーを利用して神速を使用。神速の状態のまま今度はスーパースニックアタックへと移行することでその結果、任意のタイミングで時間停止を行うという方法です」

「そ、そんなこと本当に可能なの……？」

「わかりません。所詮は机上の空論なので。やはり実際に試してみるよりありません。ですがそれには当然、多大なリスクが生じます。

……今度こそ本当に死んでしまうかもしれませんよっ？」

「それは……わかってる。わかってはいるがそれでも僕は……！」

「はあ……一度試してみてダメだったらもう二度とこのような無茶はしないと言っなら考えなくもないがのう」

『』『』 師匠（ゼクト） 『』『』

「仕方なかつつ？ こればかりは本人次第じゃし。それにこのまま話し合ったとしても平行線を辿るばかりじゃからのう。」

「これで構わないかの？」

「ハイ                    ありがとうございます」

「やれやれ。本来、憎まれこそすれ感謝される謂れはないんじゃないがのう…なんでワシの回りの奴らは揃いも揃って阿呆ばかりなんじゃろ」

「「「なははははは。いや〜それほどでも」」」

「褒めとらんわー！」

その後の結果から言えば、実験は成功した。

ただし消費するエネルギーの都合上、止めていられる時間は体感にしてほんの2、3秒程度に限られ、しかも一度使用すれば軽く2週間は身動き一つ取れない状態になるオマケ付き。あまりに実戦に不向きな技である。

だがそれでも宗次郎本人はたいそう喜んでいた。

その際、浮かべた彼の満面の笑みを見た皆が一樣に顔を赤らめたことを当人は知る由もない。

一方、宗次郎達が魔法球に籠もっている間、外では大変な事態が起こっていた。



元々、連合軍が所持していた拠点の一つ、グレートブリッジが帝国軍の手により陥落してしまったのだ。

このことをキツカケに事態は大きく変化しようとしていた……